

アジア研究センター共同研究

アジアの社会遺産と 地域再生手法

レクチャーシリーズ

8

Kanagawa University Center for Asian Studies

社会遺産(social heritage)は、生まれたときにおかれていた社会的環境を指す用語である。社会遺産は主として人に対して使われることが多いが、地域や都市もそれぞれ社会遺産を有する。アジアの諸都市は、近代において似たようで異なる複雑な国際的背景の中でそれぞれ発達してきた。近年、アジアの諸都市では地域再生が活発に行われており、それら再生事例を対象とした研究も見られる。しかし、それらの研究の多くはガバナンスなど再生手法に関するものである。本共同研究では、それらの事例を「社会遺産」から見ることにより、その地域の歴史的・文化的・政治的文脈から重層的に分析することが可能になると考える。

共同研究では、アジア各地の地域再生事例とその周辺を対象としたフィールドワークをもとに検討を進める。2019年1月、タイ・バンコクにおける低所得者居住区の調査を実施した。2020年1月には中国・広州の客家調査を計画し準備を進めていたが、COVID-19感染拡大による渡航自粛から調査は中止となった。夏を過ぎても感染が治まる気配はなく、フィールドワークを手法とする私たちの研究は方向転換を余儀なくされた。一方で、オンライン授業などで導入したZoomといったオンラインミーティングシステムは、普段なかなか会えない海外研究者たちとの距離を縮めてくれる利点をもたらした。

そこで、2020年度後半から2022年度にかけて、アジアの都市・地域をフィールドにもつ研究者・実践者に登壇いただく連続レクチャー(公開講演会)を企画・開催することとした。リアルな場からデスクトップ越しのフィールドワークへの転換である。アジアの地域・都市再生事例の課題・背景を、社会遺産という観点から捉え、相互比較した上で、国際的討論を深めることを目指している。ここに収録された連続レクチャーの記録を通じて、再生手法としてのアジア的計画論について議論を深めるきっかけになれば幸いである。

神奈川大学工学部建築学科教授
神奈川大学アジア研究センター所長
共同研究「アジアの社会遺産と地域再生手法」代表

山家京子



アジア研究センター共同研究

「アジアの社会遺産と地域再生手法」レクチャーシリーズ

Vol.8

近現代モンゴル —ウランバートルにおける 定住と都市

八尾 廣

(東京工芸大学工学部建築学系建築コース教授)

INTRODUCTION

山家京子（神奈川大学建築学部建築学科教授）

山家 それでは神奈川大学アジア研究センター「アジアの社会遺産と地域再生手法」の公開講演会を始めたいと思います。私はこの共同研究の代表を務めております、神奈川大学建築学部の山家です。

本日は東京工芸大学工学部建築学系建築コース教授の八尾廣先生から、「近現代モンゴル：ウランバートルにおける定住と都市」についてご講演いただきます。

簡単に八尾先生のご紹介をさせていただきます。八尾先生は1966年大阪市生まれ、90年に東京大学工学部建築学科をご卒業され、92年に東京大学大学院建築学専攻修士課程を修了されています。原広司研究室に在籍され、私の大学院のときの後輩にあたります。大学院修了後、原広司先生のアトリエであるアトリエ・ファイ建築研究所に入所され、その後、ご自身の設計事務所を設立されています。2008年から東京工芸大学工学部建築学科の教員として教鞭を執られており、現在は日本建築学会と日本モンゴル学会に所属されています。八尾先生の大学の研究室は、建築計画研究室になるのですか。

八尾 建築設計計画研究室になります。

山家 そうなのですね。後でご本人から正しくご説明いただいた方がよいと思いますが、アトリエでご自身の設計活動も続けておられます。

事前に本日の資料を見せていただいたのですが、ものすごく密度の高いお話を聞けるのではないかと非常に楽しみにしています。それでは八尾先生、よろしくお願いします。

八尾 山家先生、ご紹介いただき、ありがとうございます。また、本日は公開講座にお招きいただき、ありがとうございます。今ご紹介にありましたように、私は原広司さんのアトリエを出た後、自分の設計事務所を設立し、建築の実践をしながら、東京工芸大学では主に建築設計と建築計画を教えています。大学に入ったからには本格的な研究をしたいとずっと思っていて、幸運なことにモンゴルと出会いまして、2013年から本格的に調査を始め、ちょうど10年続けてきました。今日はその研究の一環を紹介させていただきます。

LECTURER



八尾 廣

（東京工芸大学工学部建築学系建築コース教授）

1966年大阪市生まれ。1990年東京大学工学部 建築学科卒業。1992年東京大学工学系研究科建築学専攻修士課程修了、アトリエ・ファイ建築研究所入所。1997年岸田建築設計事務所入所。1999年THT アーキテクト設立。2005年八尾廣建築計画事務所設立。2008年東京工芸大学工学部建築学科准教授。2017年NPO法人GER設立、副理事長。2018年東京工芸大学工学部建築学科教授。2022年東京工芸大学工学部工学科建築学教授。日本建築家協会登録建築家、日本建築学会・日本モンゴル学会会員。1999年小松市立宮本三郎美術館建設提案競技最優秀賞、2001年第7回石川景観大賞、第22回石川建築賞（県知事賞）、2016年グッドデザイン賞2016（15WINDOWS）、2020年グッドデザイン賞2020（長者丸の集合住宅）を受賞。

LECTURE

ウランバートルの調査を始めたきっかけ

それでは発表させていただきます。こちらはモンゴルの首都、ウランバートルの写真[図1]になりますが、モンゴルというと、皆さん頭の中で想像されるのは大体こういう風景かなと思います[図2]。移動遊牧民がつくった非常に完成度の高いゲルを住まいとして、家畜に寄り添いながら、年に2回から3回、宿営地を替えて、土地をできるだけ傷めずに草原の中で暮らすという生活が、今でもモンゴルで続いています。私自身も、モンゴルを訪れる度に草原には行きます。都市部から少し出るとこのような草原が広がっているの、遊牧民の方の住まいを調べさせてもらったりもしています[図3]。



【図1】



【図2】



【図3】

一方で、モンゴルにおけるウランバートルという都市部はどのような状況か、ご存じの方は少ないと思います。次にお見せる動画はドローンで撮影していますが、これが現在のウランバートルの姿です。奥に見えているビル群が中心部で、近年の経済発展で高層ビルが次々に建設されています。私がウランバートルを研究することになったきっかけは、モンゴル人留学生から見せられた1枚の写真でした。草原の中にぽつんとあるはずのゲルが、ウランバートルの丘の頂に向かってものすごく密集して立っている姿を見て、これは一体何が起きているのだろうというのが最初に感じた疑問です。彼がモンゴルに帰ったときに、すぐにモンゴルに飛びまして、彼の親戚が住んでいるゲル地区と呼ばれるウランバートルの周辺部のまちを調査したのが始まりです。

最初はなぜこのような都市が出来上がったのか、全然分らなかったのです。でも何か見えない秩序というか、必ず理由があるに違いないと思って、モンゴルのいろいろな研究を読みあさりしました。いろいろなエリアがあるのですが、2013年からそれぞれの地区ごとに1、2軒ずつ回っては調べるというやり方をしてきました。

この研究をするにあたり、モンゴルのことを全く知らなかったの、国立民族学博物館の館長も務めていた、現代モンゴルの民俗学分野の第一人者である小長谷有紀^{こながや ゆき}先生のところに、最初にご相談に行きました。そうすると、「ゲル地区というのはある種スラムのような問題地区として捉える人も多いけれど、実はそうではなく、モンゴル固有の住まいの在り方のように私は思っている。地区ごとに住んでいる人の出身地や形成年代も違うし、雰囲気も異なるから、これまで社会的にアンケートを取るような調査は行われてきたけど、あなたは住まいの専門家だから、一軒一軒丁寧に回ってみたら」というアドバイスを頂きました。

僕が原研究室に在籍していたときに、ちょうど原さんが集落調査を再開されるという話を聞いて、「インドネシアの集落調査に行きたいです」と言って行かせていただいたんです。その集落調査のようなことをずっとやりたいと思っていたので、モンゴルはまさしく調査しないではいけないということで、ずっと調査を続けてきました。一軒一軒、住居を回って実測調査をして、その中でどういう住まい方をされているかを聞いて回りました。

モンゴル国の概況

背景となるモンゴル国の概況を説明します。モンゴルは日本と遠いようで、実は非常に近い国で、日本とモンゴルの国交は非常に良好です。東日本大震災の際にも、真っ先にモンゴル政府や国民が援助の手を差し伸べてくれた、極めて親日の国です。モンゴルは社会主義国としては非常に優秀な国でしたが、1990年に社会主義体制から市場経済体制に移行した際、旧ソ連からの援助が一斉に停止したときも、日本はいち早くモンゴル支援を表明し、市場経済化に向けた人材育成や制度整備、インフラ整備をずっと助力してきました。2022年には日本とモンゴルの国交樹立50周年を迎えています。

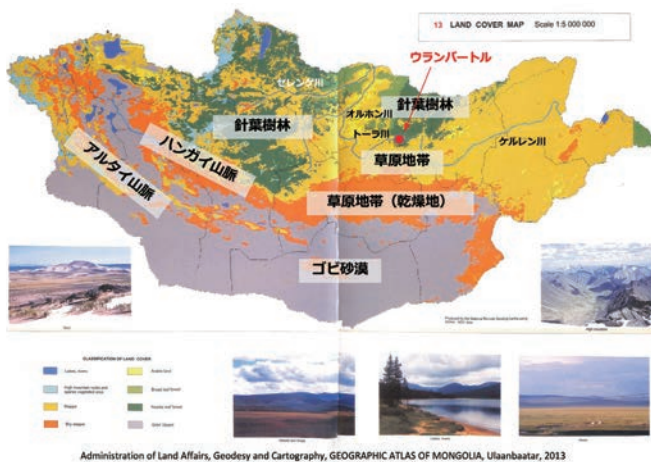
国土面積は日本の約4倍です。それに対して人口は340万人、大体茨城県と同程度です。そのうち、遊牧民は未だ30～40万人いるといわれています。人口密度にすると、1平方km当たり2人しかいないという、1人当たりの国土面積が極めて大きな国で、日本の人口密度の170分の1しかありません。ですから、手付かずの自然がものすごく残っている国です。この全人口に対して、今なんと半数近い48%が首都ウランバートルに集中しているという状況です。人種はモンゴル人で、主にモンゴル語を話します。宗教はチベット仏教が中心ですが、憲法で信教の自由が保障され、キリスト教の教会やイスラム教の

モスクも建っています。あとは元々の遊牧民の時代から続くシャーマニズムも残っています。政治は共和制で、大統領制と議院内閣制の併用です。

資源立国なので、石炭、金、銅、レアアースなどを生産する鉱工業が主な産業です。やはり中国の景気の下上に左右されて、かなり不安定ですが、全体的には平均年齢が30代という極めて若い国で、経済成長率は2022年で3.7%です。

モンゴル全体の地勢についていいますと、草原地帯が国土の7~8割を占めています[図4]。中央に大きく、かつてチンギスハンが西の方まで攻め入った広大な草原地帯があります。しかし南の方は砂漠化していて、ゴビ砂漠が広がり、北の方の濃い緑色は針葉樹林帯です。首都ウランバートルは、針葉樹林帯と草原地帯の境目の辺りに位置しています。西側にはハンガイ山脈、アルタイ山脈があり、全体の平均標高は1,500mです。

大陸性気候で、大地は非常に安定しているのですが、気候に関しては冬は非常に寒くて、平均でマイナス23度、ときにマイナス30度から40度になることもあります。それに対して、夏は極めて乾燥気候なので非常に爽やかですが、気温が40度ぐらいまで上がることもあって、気温の温度差が非常に激しい国です。



[図4]

ウランバートルの都市概況とゲル地区

Google Earthでウランバートルの様子を見てみます。モンゴル全体からウランバートルに近づいていくと、ウランバートルは東西に延びる谷筋にあります。トーラ川とセルベ川という川の合流地点にあり、東西の距離はおおよそ20kmです。20kmというと、大体東京駅から武蔵境の辺り、あるいは東京駅の東側だと西船橋の辺りまでの距離ですから、東京と比べると非常に小さな都市であるといえます。中央の都心部に寄っていくと、街路が計画されているのが分かります。これは社会主義時代にかなり本格的な都市計画がなされていて、当時は15万人の都市として計画されました。環状の道路が走っていて、これが何となくゲルのかたちを模しています。ここに2本の道路があ

り、中央に巨大なスフバートル広場があります。ゲルの上から光が入って、下に光が差していく姿を模して、当時モンゴル人の都市計画家がこの計画を立てて、ソビエト連邦に承認されてこういう計画になりました。社会主義的なすごく立派な計画です。ずっと寄っていくと、基本的には街路や街区を囲うかたちで集合住宅や施設群がつくられて、中庭を持つタイプの都市計画がされています。そこから北の方に移行していくと、僕が10年以上調査をしてきた、ゲル地区と呼ばれる都市計画外のエリアになります。ちょっと寄っていくと、こういう感じで基本的には木柵で敷地を囲み、そこにゲルを立てて住んでいます。ゲルは遊牧生活には最適な住居ですが、実は定住には向いていません。といいますのは、遊牧民は年に数回、宿営地を替えるときに、一度ゲルを解体して、ゲルを覆っているフェルトやテント生地を虫干しして、それで清潔さを保ちます。僕も見に行き行って実感しているのですが、一度定住してゲルを立ててしまったら、それを年に2回も解体するなんてことは相当大変です。解体しているときにどこに住むのだという話もあるので、定住生活の場合は、あまりゲルは向いていないと思います。ですから、寒さもありますし、こつこつと蓄財をして、ここに屋根が見えていますが、こういうふう固定の家、バイシン(モンゴル語で建物という意味)を建てて、だんだんその家に住んでいくという流れになります。ただ、ゲルはいろいろ使われていて、後ほどご説明しますが、おそらくウランバートルではずっと使われ続けるのではないかと考えています。

このゲル地区は、北方と西方の谷筋に広がっています。ものすごい面積にわたって拡大していて、ずっと北の方にはナツノエ地区という別荘地があるのですが、ついにそこまでゲル地区がつながってしまいます。

それからまちの南の方へ行くと、そこには近年開発された都市があり、ここは例えば鉱物資源の利権を持っているような富裕層が住んでいます。ウランバートルは貧富の差も激しいのですが、さらに南の方は、インターナショナルスクールもあるような超富裕層のまちで、近年続々と建物が建っています。僕が最初に行ったときはまだ建設を始めたところだったのですが、ここ10年ですっかりまちの姿になりました。

それから西の方にも近年、副都心が出来つつあります。というのも、ウランバートルの南側の山を越えたところに新しい国際空港がようやく出来上がり、そこへ幹線道路が整備されて、道路沿いに市庁舎が移転して、その辺りが都市化していくという流れになっています。その北側を見ると、やはりゲル地区があります。ここは1960年代に、ウランバートルで100年に一度といわれる洪水が起きて、そのときに避難した人々たちを住まわせた、計画的につくられたゲル地区です。このゲル地区は整然としていますが、これが後のゲル地区のモデルになったのではないかとわれています。

ウランバートルの歴史の変遷

現代のウランバートルが果たしてどういう経緯でこういうまちなったのかを、ちょっと歴史をひもといてみたいと思います。まずモンゴルの非常にユニークな点は、1920年代からごく最近の90年代まで社会主義国だったわけですが、その前はどうかというと、17世紀から20世紀初頭にかけては清朝の支配下にありました。つまり、漢人が相当に入り込んでいました。17世紀から19世紀にかけては、17世紀にハルハの人々が崇拝したチベット仏教のジェブツンダンパ・ホトクトという活仏を中心とする寺院がウランバートルの前身でした。モンゴルでは、僧侶もみんな基本的に遊牧の人なので、その寺院もウランバートル近辺の針葉樹林と草原の境目を28回も移動していました。とうとう規模が大きくなって定着したところが、現在のウランバートルになります。ですから、元々は宗教都市でした。

社会主義時代は全ての土地は国有で、移住も制限されていました。首都ウランバートルの労働力が足りなくて、地方から呼び寄せてどんどん人口が増えたときに、こうしたアパート[図5]に住めない労働力を、計画的にゲルに住ませたのがゲル地区の始まりです。いってみれば、あぶれた人たちをゲルに住ませたのです。ゲルは2時間もあれば家族で建てられて、冬のマイナス30度～40度でも、ストーブを焚けば生きていけるので、便利なツールとして使われているわけです。そのゲル地区が、社会主義時代に形成を開始しました。



[図5]

民主化と土地所有の法の制定

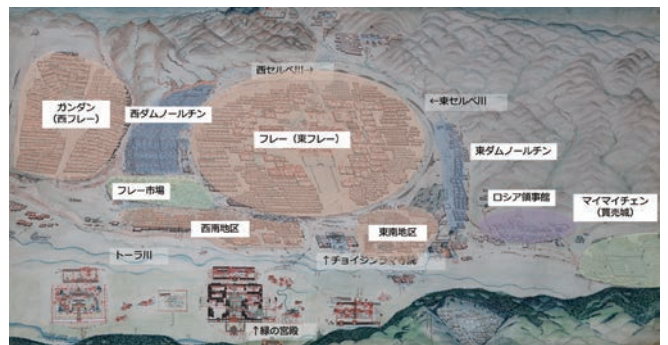
その後、1992年に資本主義へ移行しますが、そのときに国民の移動の自由化も憲法で制定され、初めてここで土地の所有の概念ができます。つまり、草原の土地は誰のものでもなく、清朝支配下では、封建領主の支配下だったので、土地所有の概念がありませんでした。社会主義時代は、土地は国家が所有しているものですから、私有の概念がなく、ようやく1992年の民主化以降に土地に関する法律、それから土地所有に関する法律ができます。それで土地所有ができるようになりました。

なぜそういう法律ができたかというと、この土地所有に関する法が、実はゲル地区を支えている背景にありました。この法律により、1家族当たり0.07ヘクタール、つまり700平米もの土地を無償で所有できるという所有権が保証されました。それがさらに改正されて、2008年には国民1人当たり700平米になりました。700平米というとおよそ200坪ですから、かなりの面積ですよ。土地を勝手に不法占拠した人も、一定期間住むと自分のものにできるという制度になってしまったので、このゲル地区が通常のスラムと大きく違うところは、既に皆さん土地を所有しているという点です。

なぜ当時そのような法律ができたかというと、民主化以降、経済が混迷する中で、社会主義時代にうまくいっていた工場や企業も、全部払い下げされてしまったんです。それで混乱する中で、アジア開発銀行のアドバイスで、「土地を所有する制度をつくって、みんなに持たせましょう。そうすると不動産のやりとりが生じて、一種の経済のカンフル剤となるから」といわれ、その圧力で制定したわけです。しかし今、実際問題として不動産市場が育っているかというと、うまく育っていない。その辺りはまた後ほど説明します。

20世紀前半のウランバートル市街地の様子

これは1913年に名画家のジュグデルが描いた、ウランバートルの前身にあたるウルガの絵図です[図6]。極めて詳細に描かれた絵図で、ウランバートルにあるボグドハーン宮殿博物館に掛けられているものを写真で高精細に撮ったものです。



[図6]

中央にフレイという場所があります。「フレイ」というのはモンゴル語で都市を意味しますが、他に都市を意味する言葉に「ホト」という言葉もあって、フレイはどちらかというと政治をつかさどるエンジンを指すような言葉で、ホトは宿营地、遊牧で集まる場所を意味します。どちらのラインも微妙に違うのですが、この寺院のところはフレイと呼ばれています。西側にはガンダンというチベット仏教の大きなお寺があり、これだけは残っています。そのフレイの両側に商業地区のダムノールチンという場所があり、中国人が入り込んでいて、東側には買売城と呼ばれる中国人街がありました。それからロシア人も入植して、ロシア人街をつくっていました。当時、西洋のイギリスやノ

ルウェーなど、さまざまな国からウランバートルを訪れた人たちがいました。

これがガンダン寺の当時の様子です[図7]。1927年に撮られたものですが、このガンダン寺は今も残っていて、その周りの寺内町も、半ばゲル地区化していますが、今も歴史的地区として残っています。周りは僧侶の家ですが、この家を見ると、ゲル地区の住まいとほとんど変わらないことに気付かれると思います。柵で囲って、その中にゲルをつくり、柵の中にまたバイシンもつくるという住まい方は、おそらく結構古いルーツがあるように僕も思っています。

当時の柵は今よりももう少し高く、大体2.5mくらいの丸太でつくられています。なぜこのような高い柵で囲うかについては、僕もずっと考えているのですが、まだ解明できていません。この後お見せしますが、当時、中国人もウランバートルに住んでいたので、中国の四合院^{※1}の影響を受けたのかなとも思うのですが、古い寺院の絵図を見ると、必ず柵で囲った中にゲルが立っている絵が描かれてるので、もっと深いルーツがあるのではないかと考えています。

これはフレーの中央の寺院の様子です[図8]。こちらは買売城、中国人街の様子です[図9]。ご覧のように、壁は泥を塗って土壁にして、四合院の住居を建てています。



[図7]



[図8]



[図9]

チンギスハンの時代もそうだったのですが、モンゴルの人たちは異民族を支配していく中でも、異民族の文化を破壊しないのです。カラコルム^{※2}に、チンギスハンがつくったカラコルムの都市を想像して再現された模型がありますが、中国人は中国人街のようにつくるし、アラブ人はアラブ的なキャラバンサライ^{※3}のつくり方をしています。モンゴル人はその都市にずっといるわけではなく、広大な草原を面的に支配しているという図式で、その中でもゲルに住んでいるという再現模型なのですが、他国の人たちをうまく利用して、その技術も取り込みながら支配し、その中で彼らの文化を壊さないというのが、多分モンゴル人のやり方なんだと思います。

これは商業地区のダムノールチンの写真で、左側に木材が積まれた巨大なタワーがあります[図10]。これは写真で測ってみると8mから10mにもなります。今、文系の先生方と一緒に、古写真や絵図からウランバートルの歴史を読み解く共同研究をしているのですが、なぜこういうタワーがつけられたのかはまだ分かっていません。ただ当時、相当数の木材が使われていたことは見て取れます。つまり草原の中で都市をつくるときに、やはり建築の材料が必要で、そうすると都市の近くに針葉樹林がないと調達できないから、モンゴルの都市は大体森林と草原の境目辺りにつくられています。その理由は木材が必要だからです。

別の写真では、チベット仏教の寺院の大きな壁面に、製材された角材が積まれた様子が見えます[図11]。ちょうどこの角材が、先ほどの木材タワーの材寸と似ているのではないかとということで、おそらく当時、こういうふうと同じ規格で製材され、ユニット化された角材を積み上げて壁をつくるという構法が用いられていたのだらうと思います。

これはロシア人街にあるロシア総領事館の写真です[図12]。



[図10]



[図11]



[図12]

ちなみにこういった写真は、当時この地に調査でやってきた研究者や冒険者、商売人たちがかなりの写真を残していて、それらが大英博物館やノルウェー、アメリカの自然史博物館など、世界各国の博物館に所蔵されています。私たちは共同研究で、膨大なアーカイブから写真を読み込んで、当時の様子を立体的に浮かび上がらせる研究もしていますが、これもまだ研究途上です。

※1 四辺に建物を配置し、中央を中庭とする中国伝統住宅の様式。

※2 ウランバートルから西へ230km、ウブスハンガイ県西部のオルホン河畔に位置する都市。かつてのモンゴル帝国の首都でもあり、古都としても知られている。

※3 隊商(キャラバン)の商人や巡礼、旅人が宿泊できる施設。交易地の要地につくられ、市場に隣接して建てられた。

社会主義時代の都市計画

これは社会主義の都市計画の直前、1964年の地図で[図13]、ウランバートル市の都市マスタープラン局から入手したものです。この地図を見ると、先ほどの絵図で示したフレーの輪郭がまだ残っています。中央にフレーの広場があり、寺院群なども残っています。

これは1953年に初めてマスタープランがつくられ、1954年に描かれた、モンゴル人建築家チメドが作成した都市計画図です[図14]。先ほど説明したように、ゲルの天窓から光が南側に差していくイメージが基盤となっており、その軸となっているのは、チベット仏教のチョイジン・ラマ寺院といいまして、ガンダン寺とはまた別の立派なお寺があるのですが、その軸線を延ばしていくというかたちでつくられています。でもこの図をよく見ると、先ほどお見せしたような、この前のウルガ時代の地図を下地に描かれているのが透けて見えます。これもきちんと解明したいと思っています。このガンダン寺の周りだけは、かつてのまちの街路の様子が見えますが、フレーの周りは社会主義時代の都市計画によって一切上書きされてしまったということが、この絵を見るとよく分かります。つまり、社会主義は文化を破壊したわけです。スターリンは、チベット仏教の僧侶を3,000人以上虐殺し、寺院もかなり破壊しました。ですから社会主義によって、都市も真っ白に塗り替えられてしまったということです。

これはフレッシュな情報で、2022年にモンゴル国立公文書館で入手した中心市街地の詳細な街路計画図です[図15]。よく見ると、軸線が微妙にずれたりしていますが、ほぼこの計画通りに今の街路が出来上がっています。こうした図面があることが、実は最近まで知られていなくて、モンゴル科学技術大学の先生も「図面なんてあるはずがない」と言われていました。図面を所蔵していた建築家協会の建物が紛争時に全焼し、そのときに失われたとモンゴル人の研究者はみんな思っていたのですが、公文書館が新しくなった際に、その中に実は図面が大事に保管されていることが分かりました。だから、そうした資料調査も、今鋭意進めているところです。

これが社会主義時代に塗り替えられたまちの姿です[図16]。一部は木造ですが、多くは真っ白な漆喰塗りのれんが造の建物です。こう

した社会主義国標準の新しいアパート群がつくられていきました[図17]。

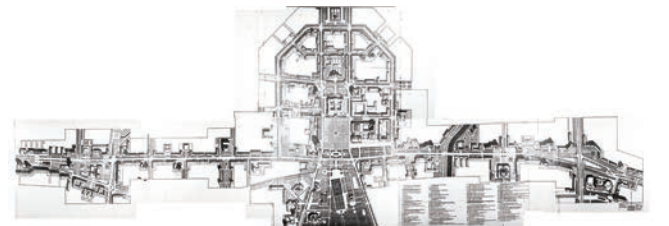
今、ウクライナの戦争の情景を見ると、ウクライナでも社会主義時代の遺産であるアパート群が次々に破壊されています。モンゴルとかなり共通項があるので分かるのですが、ロシアは社会主義時代の歴史を自ら壊しているのだと思います。



【図13】



【図14】



【図15】



【図16】



【図17】

シベリア抑留された日本人と首都建設

次の映像も公文書館で入手したのですが、ウランバートルの都市を建設する様子で、映っているのはみんな日本人です。シベリア抑留という言葉は皆さんご存じだと思いますが、第2次世界大戦の敗戦後、ソビエト連邦が満州にいた日本人60万人を連行して強制労働させたというのが、シベリア抑留の問題です。2022年にシベリア抑留者の映画※4が公開されましたが、ロシア各地でも本当にひどい状況で、寒い中で食料もろくに与えられず、多くの人が亡くなりました。そのうち1万2,318人がモンゴルに連行され、工場や倉庫、建築、道路の建設現場に送られました。モンゴル政府が首都建設のために集めたモンゴル人労働者は1,200名といわれているので、1946年から7年にわたり、およそ1万2,000人も日本人抑留者がこの都市建設に投入されたというのは、相当なカンフル剤になったはずです。その証拠に、1930年代と40年代に都市建設がものすごい勢いで進んでいるのが、写真の記録から見ても分かるのです。なので、この社会主義時代の都市建設に、実は日本人抑留者が相当な力になっていたということは、モンゴルの方にも伝えたいし、日本人も知っておいた方がいいと思います。日本人抑留者のうち、1,618名の方は亡くなっています。今、ウランバートルの東側の丘の上に、大きくて立派な慰霊碑が立っています。この映像を見て、僕は胸が熱くなったんです。抑留された日本人が、これはまだ夏の風景だからいいですが、マイナス30度にもなるような冬でも軽装で、一生懸命働いて、祖国へ帰りたいたいという思いで一生懸命やっているわけです。うまく言えないですけど、日本人特有のものづくりに対して一生懸命やる勤勉さや真面目さにすごく胸を打たれます。これは首都建設の貴重な建築記録でもあります。

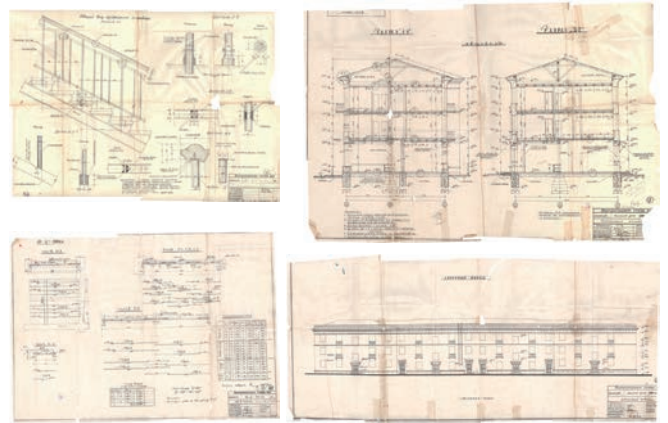
2022年にモンゴル国立公文書館に行って、集合住宅の図面を探してコピーをたくさん取ってきたのですが、その中に日本人名があって、それにもすごく驚きました。これらは日本人が清書をした図面です[図18]。トレーシングペーパーにインキングされた非常に精緻な原図ですが、右下に8名の日本人名が見つかりました。これはロシア語でトレースと書かれていました。つまり、ソビエト連邦の設計者が鉛筆で描いた図面を保存用にインキングする仕事を、図面が描ける日本人が担っていたことの証拠になります。これは初めての発見です。そういううわさはあったのですが、つまり室内の労働をしていた日本人がいたらしいというのは聞いていたのですが、実際に日本人の名前が発見されました。僕も図面を引くので、一体どういう気持ちでこの図面を描いてたんだろうと、非常に胸が熱くなる思いです。日本人の描いた図面は、本当に丁寧に描かれているのです。彼らの気持ちを思うと、本当に泣きたい気持ちになります。

その他にこうした古い記録を見ると、当時の建築の構法もよく分かるのですが、れんがが大量に用いられていたのが分かります[図

19]。記録を見ると、1930年にナライハ炭鉱での石炭生産が開始され、石炭を使えるようになったことで、れんがが大量生産できるようになり、建築資材が木材かられんがに置き換わっていったことが分かります。

これは社会主義時代のゲル地区の写真です[図20]。そして、これが今のウランバートルの姿です[図1]。歴史をたどっていくと、最初の宗教都市からずつつながって、モンゴルの伝統もありながら、社会主義を経て市場経済化していく中で、一見混沌としたこの都市が出来上がった経緯がようやく理解できると思います。

※4「ラーゲリより愛を込めて」は、シベリアの強制収容所（ラーゲリ）に抑留された実在の日本人捕虜・山本幅男が主人公の伝記映画。



[図18]



[図19]



[図20]

現在のウランバートル市街地の様子

ざっとウランバートルの中心部をご紹介します。これが中央のスフバートル広場で、奥に見えるのが国会議事堂です[図21]。この国会議事堂は、表面の広場側は増築されて新しくなっていますが、後ろ側は社会主義時代の整然とした建物で、これも日本人抑留者が建設に参加しています。大変立派な広場で、休日になると本当に人でぎわっています。夜景はこういう感じです[図22]。

広場に面して主だった建物があり、東側には国立オペラ劇場があります[図23]。元々はピンク色ではなかったようで、最近また白に戻されましたが、このオペラ劇場の建設にも日本人が関わっています。それから西側には市庁舎があります[図24]。

近年は中国や韓国の資本がどんどん入り込んできて、こうした高層のオフィスビルがにぎにぎと建ち上がっています[図25]。

これは社会主義時代にできた庶民的なノミンデパートです[図26]。デパートの前の広場や通りはこういう感じで[図27]、平均年齢の若い国なので、全体的に若い人が多い印象です[図28]。モンゴルの方々は概して皆さんおしゃれですね。感覚としては日本人とあまり変わらないです。僕もモンゴルに行って全く違和感なく、すぐに溶け込むことができました。

市内には社会主義時代につくられた、れんが造の比較的古い集合住宅がまだ相当数残っています[図29]。街路はとても広く計画されたので、街路側に1階部分が張り出して、そこが店舗になっています[図30]。



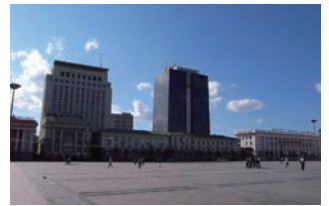
[図21]



[図22]



[図23]



[図24]



[図25]



[図26]



[図27]



[図28]



[図29]



[図30]

交通機関は、鉄道は都市を結ぶように東西に走っていますが、市内の主な移動手段は車、バス、タクシーになります[図31]。交通渋滞はひどいです[図32]。

これは集合住宅の中庭です[図33]。広い中庭がありますが、後の開発でこの中庭にもビルが建ち始めており、環境の悪化が問題となっています。

これはモンゴル相撲をするドーム前の広場です[図34]。日本でいうと原宿のような、おしゃれな若い人たちが集まる雰囲気のある場所です。社会主義時代の建物も相当数残っています[図35]。

これは今、新空港連絡幹線道路沿いに建ち上がりつつある、新都心の建設現場です[図36]。新庁舎はもう建ち上がりました。

市街地の外れにはカシミア工場などの工場群があります[図37]。カシミア工場も、実は最初、日本の戦後補償でつくられたものです。モンゴルのカシミアは素晴らしく品質が良いので、世界中に輸出しています。

建設の技術は、やはり精度があまり良くないです。というのも、モンゴルは10月から3月まで建設行為が禁止されているのです。あまりにも気温が低くて、コンクリートが打設できず、内装工事ぐらいしかできないので、専門の建築業者が育たないのです。ですから日本のように、身近に当たり前に職人がいる世界ではないです。大体、総合的な何でも屋さんみたいになってしまいます。そこがモンゴルの建築技術の発展の上では非常に問題かなと思っています。

これは今も残るガンダン寺です[図38]。社会主義時代に破壊されなかった貴重なガンダン寺で、中に大きな大仏がいます[図39]。

これは南側の富裕層向けのまちを丘から俯瞰したところです[図40]。今は続々と高層マンションが建っています。一方で、北方にはこうしたゲル地区が広がっています[図41]。

草原の中には、ちょっと現代化した遊牧民がいます。パラボラアンテナを持っていて、インターネットにも接続する遊牧民の人たちです[図42]。でも中では昔と変わらない生活を送っています[図43]。



【図34】



【図35】



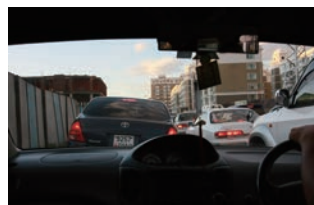
【図36】



【図37】



【図31】



【図32】



【図38】



【図39】



【図33】



【図40】



【図41】



〔図42〕



〔図43〕

現代モンゴルにおける住まいと環境の図式

これから、僕が調べてきたゲル地区の話をしたしたいと思います。

あまり単純化してはいけませんが、図式的に示すと〔図44〕、都市部には社会主義時代にできた定住のアパート群があります。その系譜を継いで、今、民間のアパート群が建っています。こうしたアパートは当然インフラにも接続しています。冬は発電所で出た熱を市内までずっとお湯を引いて、そのお湯がラジエーターを通して暖房となるわけですが、そうした暖房インフラにも接続しているエリアです。

それからゲル地区は一見スラムと言う人もいますが、歴史をたどってみると、やはりモンゴルではある種の当たり前の都市定住の姿と僕は捉えています。ハシヤーと呼ばれる木柵で囲い、その中にゲルあるいはバイシンを立てる、どこことなく仮住まい的な感覚を持った定住の姿がゲル地区にはあり、それが草原とのバッファゾーンにあるという図式が見えてきます。



〔図44〕

近現代モンゴルにおける定住とは何か

研究室では、2013年からゲル地区のほぼ全域にわたる56件の詳細な調査をして、1地区につき1、2軒ずつ一通り回ってきましたが、社会主義時代に建設されたアパートでどのようにモンゴルの人が暮らしているのか気になる、2019年からその調査を始めたところです。あとは、ゲル地区では7割以上の人がセルフビルドで固定の家をつくられているので、一体どういう構法で建てているのかを、建設中の家を訪ねながら調べるといった調査をしています。

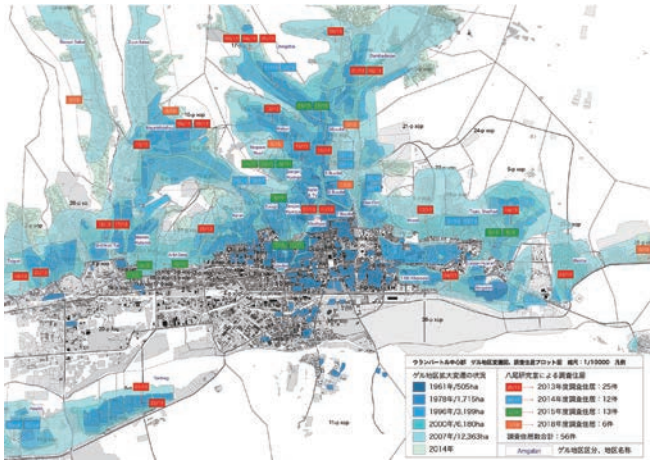
その中で今、研究としては「近現代モンゴルにおける定住とは何か」という大きなテーマを掲げています。3,000年にわたり、遊牧生活が非常に根強く伝統的であった国で、人びとが1カ所に定住すると、どういうことが起きているのか。モンゴル人にとっての定住は、われわれ日本人の定住とは明らかに感覚が違うところがあって、われわれはもともと農耕民族ですから、土地を持ったらその土地を加工し、そこにしっかり根付いた家建てる、そうしたらずっとそこに住むという感覚が定住です。ところが、モンゴルのゲル地区を見ていると、30年暮らしている人もいますが、われわれからすると、なお仮住まい的な感じがします。その定住とは何だろうということが研究テーマになっています。そして、モンゴルにおける都市とは何かということも、さらに大きなテーマとなっています。

ゲル地区の住居調査

ゲル地区の調査のプロット図です〔図45〕。濃いブルーから薄いブルーにかけてゲル地区が拡大していった様子を示しています。このように一軒一軒回ってヒアリングをしています〔図46〕。僕はモンゴル語はほとんどあいさつしか話せないのですが、通訳できる学生さんや役所の人に協力してもらい、通訳してもらいながら、「お父さんはどこに寝てるの」といったことまで聞いています。

これが調査住居の実測図で〔図47〕、配置図にプランを落としたものです。すごくバリエーションに富んでいて、一つ一つ違うように見えるのですが、ある一定のパターンは見えてきます。調査の対象はてんでばらばらというわけではなく、基本的にはウランバートルのゲル地

区開発局という役所に相談し、役所が協力してくれる住民をピックアップしてくれて調査しています。もう一つの方法は、外観から見て、住まいに対する意識が高そうだと分かるときがあり、そういうときはいきなり飛び込みでお願いして、調査をさせてもらっています。



[図45]

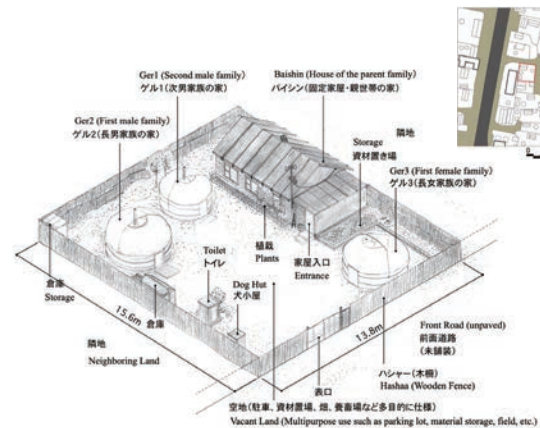


[図46]

ゲル地区の住居の構成

これは典型的なゲル地区の住まいの姿です[図48]。ハシャーと呼ばれる木柵で囲って、ゲルを建て、バイシン(固定の家屋)も建てます。ただ、住まい方はさまざまで、ここでは結婚して独立した長男、次男、それから長女の家族がゲルに住んでいます。親世帯はバイシンに住んでいます。しかし、モンゴルの人たちは多世帯居住はしないので、いずれ独立して出ていく前提です。最近Google Earthで見たら、この次男家族は既に独立したようで、そこに親世帯が増築していました。このように流動的に住まいの在り方を変えていくのにも、ゲルは便利に使われています。

それから上下水道がないので、トイレは外部にあります。小さな小屋を建てて、家からできるだけ離れたところに3mぐらいの穴を掘って、そこに排せつしています。上水はどうするかというと、このゲル地区には500mから1km以内に給水所があり、そこにタンクで水を取りに行っています。



[図48]

ゲル地区の土地利用の状況

どの家も敷地をかなり広く持っています。僕が調査した住居で平均すると、^{けんべりつ}建蔽率12%程度しかありません。これだけ広い土地を持っているのだから、もっといろいろ使ったらいのにとおもいますが、使っていない人がかなりいて、土のままです。これは、その中でも家庭菜園や庭園をつくっている家の庭部分に色を塗ったものです[図49]。黄色は温室を設けている部分です。本当に土地利用があまりされていません。

何でそういうことが起きているかというと、元々極めて乾燥気候なので、一度土を掘り返してしまうとなかなか草が生えてこないのを皆さん知っているのです。モンゴルの人たちにとっては大地が自然ですから、それを尊重するために、ゲルはあえて土を掘らずにそっと置いています。ですから遊牧民にとっては、ある意味、土を掘るのはタブーなのです。そのこともあって、あまり土地の加工をされないの、こういうことになっています。

ただ、日本での生活経験がある人や、土木技師のような土を掘る

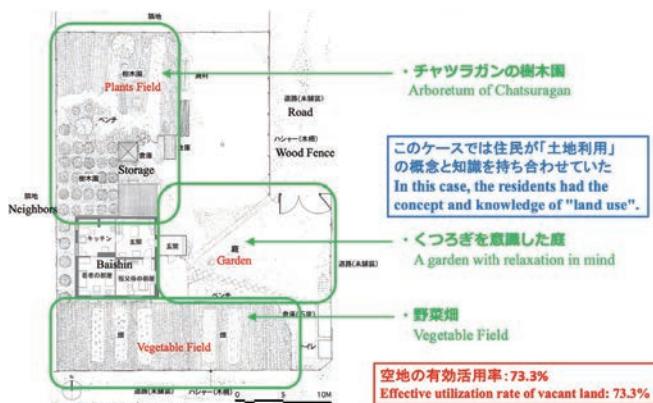


[図47]

技術を知っている方は例外です。これは社会主義時代に土木エンジニアだったおじいちゃんの家です[図50]。すぐ立派に土地を加工して、樹木を植えたり、菜園をつくったり、ちゃんと庭もつくっているのです。自宅にも地下室をつくっていましたが、そういう技術のある方は、こういうふうに土地を加工しているわけですが、多くの人はそれをしていません。



[図49]

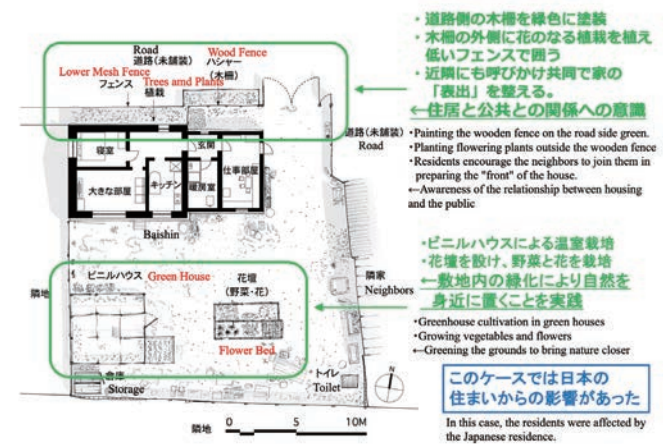


[図50]

こちらの住民は、静岡に観光客向けのゲルに泊まれるキャンプ場がありますが、そこで暮らしていた方が日本の住宅地を見て、垣根など素晴らしいと思い、自分の家でもやろうということで、道路側の木柵を緑色に塗って花の絵を描いたり、草花を植えてベンチを置いたりして、公共に対する表出を整えている珍しい家でした[図51]。敷地内に野菜畑をつくったり、ビニールハウスをつくったりして、土地利用していました。ですから、元々そうした土地を加工するという概念がないだけと思うので、そういうことを分かった人は実践しています。

これがその家の外観です[図52]。この家の奥さんが素晴らしくて、スケッチを描いて[図53]、近隣のお母さん方に一緒にやりませんかと呼び掛けたので、この通りだけ木柵が緑色に塗られています[図54]。これは敷地内の様子です[図55]。モンゴルの方は緑が好きなので、ちょっとしたきっかけがあれば、皆さんこうやって緑を植えて、水道がないにもかかわらず、大事に水をやって緑を育てる人もいます[図56]、このゲル地区も何かを機に今後変わっていくのではないかと考えています。

これだけの土地があるからこそ、ゲル地区がインフラにも接続せずに、ここまで存続してこられたのだと思います。土地のポテンシャルといいますか、もっと密だったら多分いろいろ問題が起きていたと思います。ただ、今もやはり穴を掘って排せつしているのも、土壌汚染は進んでいますし、石炭ストーブを燃やすために、冬の大気汚染が非常に問題となっています。地方都市の小さな規模のゲル地区なら全然大丈夫なのですが、ウランバートルほど集積してしまうと都市問題になっていて、かなり深刻です。



[図51]



[図52]



[図53]



[図54]



[図55]



[図56]

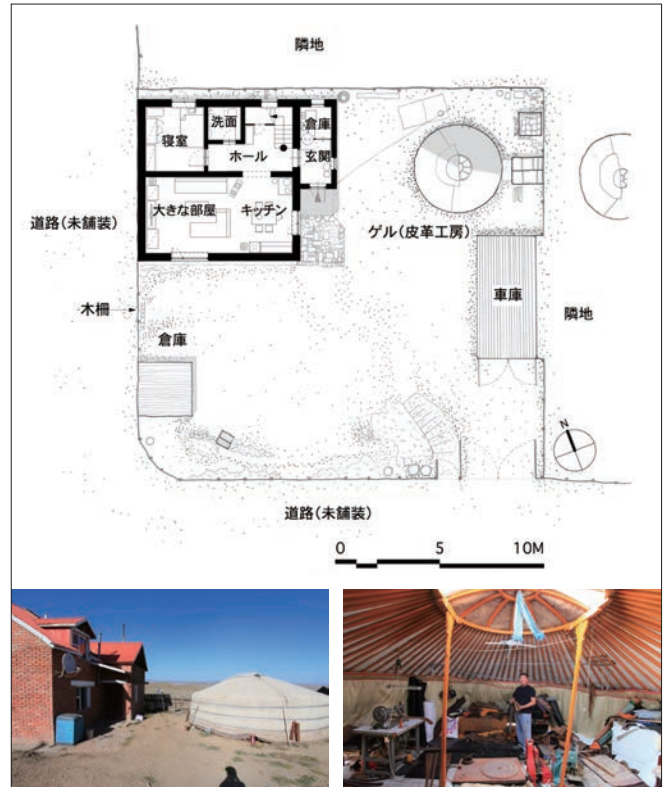
定住における住居の補助ツールとしてのゲル

定住生活において、ゲルは生活をサポートする非常に便利なツールとなっています。アンケート調査をすると、ゲルがいろいろな使われ方をしていることが分かりました[図57]。シャーマンの祈りの場、仕事場、家内制手工業の工場、子世帯の住まい、それから余裕のある人は、ゲルが好きだから夏のリビングとして利用するという方もいます。あと、貸家になっている人もいます。ゲルは非常に合理的な建物で、2時間程度で建てられるので、ずっとなくならずに、便利なツールとして使われていくのではないかと思います。

これは工場として使われているゲルです[図58]。この方は地方で音楽教師をしていたのですが、ウランバートルに出てきて、観光客向けのキーホルダーなどの革製品を加工する技術を覚え、それでかなりもうけている方です。とても頭が良い方で、家の中もすごく工夫して、室内にトイレを設けている珍しい方でした。



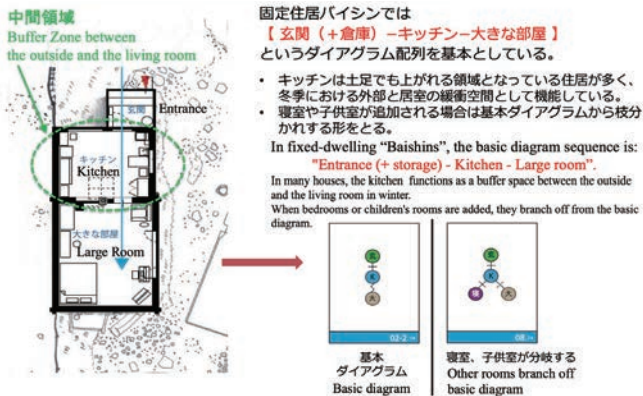
[図57]



[図58]

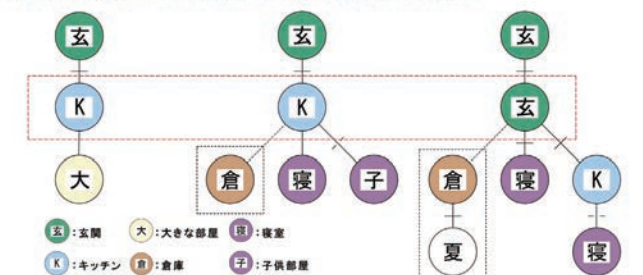
間取りのダイアグラム分析

次に、バイシン(固定の家)の間取りはどうなっているかを、実際にはかなりバリエーションがありますが、ダイアグラムを描いて比較しながら見ていきます[図59]。基本的な軸として、玄関、それからキッチン、大きな部屋という連なりが軸となっていることが分かってきました。大きな部屋というのは、モンゴルではリビングとはいわず、大きな部屋、小さな部屋といいます。大きな部屋はトモロー、小さな部屋はジググローというのですが、これが軸としてあります。これはどういうことかという、冬の生活を見るとすぐに分かりました。玄関、キッチン、大きな部屋と連なりますが、玄関やキッチンがバッファゾーンになっています[図60]。間取りで説明すると、玄関とキッチンは土足で上がってもいいゾーンになっています。僕たちもキッチンに入って靴を脱ごうとすると、「土足のままでいいよ」と言われました。奥まで土足でいいという人もいれば、奥は土足は駄目という人もいますが、いずれにしても一番奥が居住スペースになっています。冬はかなり寒いので、皆さん大きな防寒靴を履くわけですが、トイレは外にあるので、相当頻繁に内外の出入りがあります。そうしたときに、靴脱ぎが結構面倒くさいのです。それで、キッチンのゾーンはストーブも置かれ、すすで汚れるということもあり、土足でもいい靴脱ぎの場となる中間領域になっています。なおかつ、玄関から侵入してくる冷気がダイレクトに入ってくるゾーンなので、住まいの領域を一番奥にするということは、冬の生活を見るとすぐに分かる図式なのです。



[図59]

50件中38件は、下全てキッチンや廊下、または/バイシン内の2つ目の玄関などの中間領域を軸に複数の部屋や主室へと接続している。（赤点線内）



これは、風除室としての玄関だけでは冷気が主室である大きな部屋や寝室に侵入してしまう為、その対策として玄関に隣接して中間領域を設けていると推測できる。また、24件中17件がこの中間領域に当たる部屋で靴を脱いでおり、ストーブを配置している割合も高いことから、中間領域までが汚れが許容される領域として認識されているのではないかと。

[図60]

バイシンにおける居室の空間分割の類型

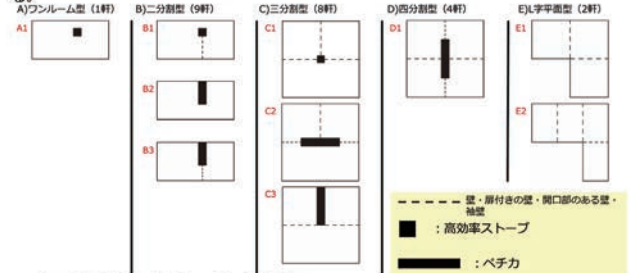
室内に置かれている暖房器具が、単体の高性能のストーブの場合もあれば、ロシアから入ってきたペチカで、れんがの壁を積み上げて、その中に煙道を通して放熱壁をつくって暖房する方式と、両方ありますが、大体その暖房器具が基点となって領域分割がなされる傾向も読み取れました[図61]。

どちらかという低所得者の人が多くて、こつこつ蓄財して自力で建てているので、そうすると、この部屋でどうやって暮らしているのかと生活場面を聞いたところ、このように生活場面が重複していることも分かりました[図62]。料理と食事の場所は分かれています。ここに暖房の壁、ペチカがあって、奥の tomorrow（大きな部屋）ではあらゆる生活場面が展開します。ただ、この生活場面を展開するのに彼らはどうやっているのかというと、小さくて低いスツールを使うのです。スツールや小さなテーブルで場面転換して、生活場面を変えていることも分かってきました。

小長谷先生は「丸いゲルを四角く住む」とおっしゃっていましたが、バイシンとゲルは図式が非常に似ているのです[図63]。ゲルは、寒いからやはり下屋を設けたりもするわけですが、風除室となる玄関に入って、中央に光が落ちてきて、そこを中心として空間分割がされて、右手に調理、食事の場所があり、左手に椅子が並び、一番奥がヒエラルキーが一番高く、主人の席か仏壇が置かれています。バイシンの

場合は南側に開口部があって、天井は低く抑えていますが、大体入り口が東側にあり、入って右手に調理の場があり、奥にテレビ台や仏壇が置かれていて、本当にゲルを四角くしたような感覚の家です。建設の過程もゲルとは全く異なりますが、どうもゲルと同じような感覚で固定の家をつくっているような気がするので、やはり長い遊牧生活で染みついたゲルの感覚というのは残っているのだらうなと思います。

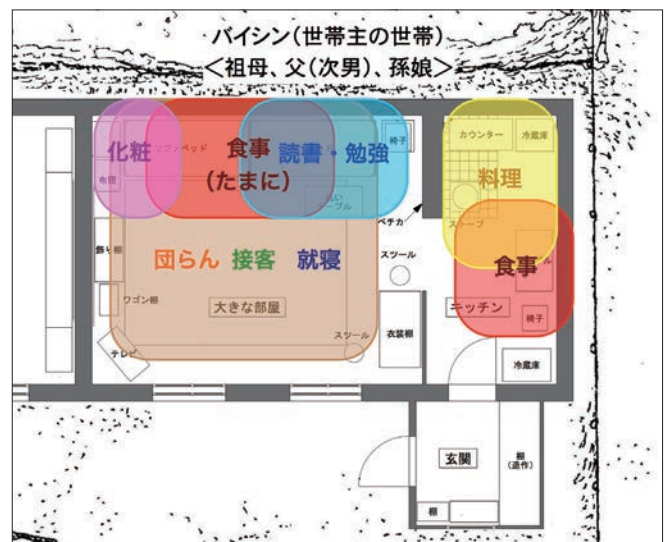
暖房設備・空間分割の方法により分類すると、バイシン内部の分割数によって5つのタイプロジーに分けられた。※主に生活が展開される一階のみを対象とする。また、玄関などの付室は省略する。



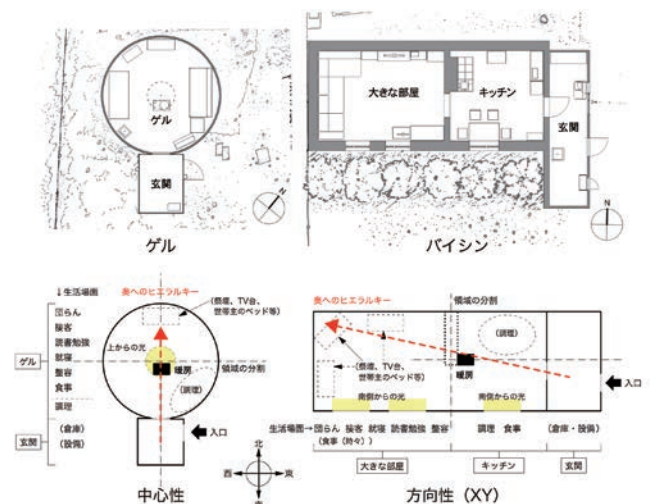
※ストーブの種類は、間取りに大きく影響する。

- ・ ペチカ（放熱壁）は空間の仕切りとしても用いられている。
- ・ 高効率石炭ストーブを用いた場合は部屋を一体としてフルルーム的に住む傾向がある。
- ・ 低圧石炭ストーブによる温水循環型の各室暖房を用いると比較的自由度の高い間取り（上記 E）にする事が可能となる。

[図61]



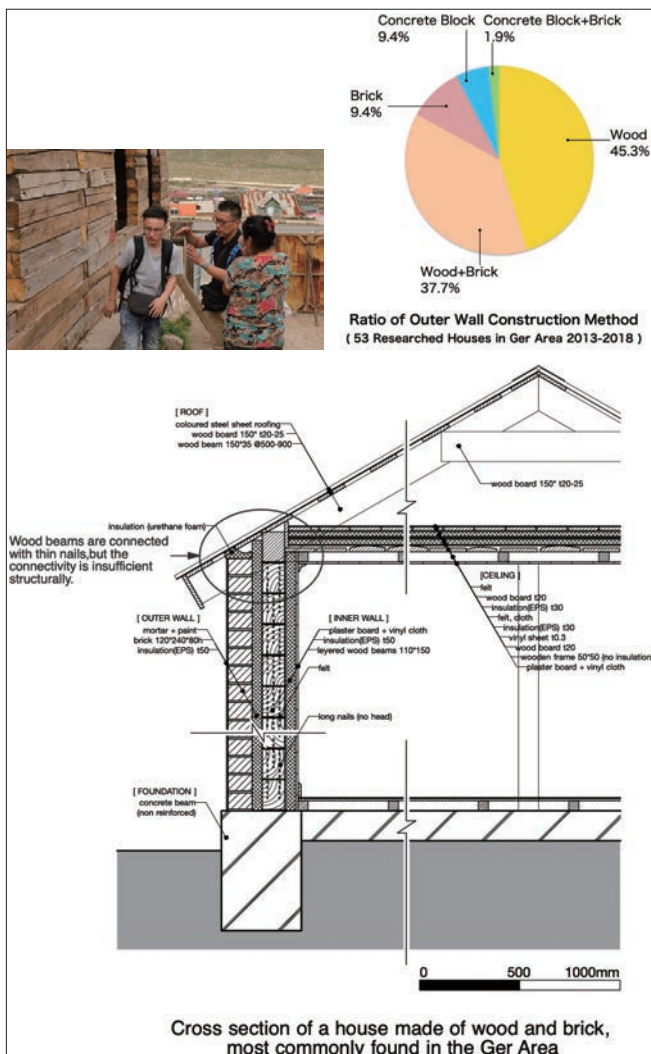
[図62]



[図63]

セルフビルドによるバイシンの構法

最近調べている構法の研究です[図64]。モンゴル人の学生さんから大工さんにもいろいろヒアリングしてもらって、ゲル地区のバイシンがどういう構法で建てられているのかを、何パターンか抽出しています。どういつくり方が一般的かという、左側に写真がありますが、角丸太を30cmぐらいのくぎで打ち付け、互いに結びながら積み上げていきます。それで基本の壁をつくり、そこに梁を渡して、最初は木造でつくりま^{はり}す。内側に断熱をしています、天井はフェルトを何枚も天井裏に重ね、その上に板を敷いて天井裏の部屋をつくり、そこを物置にしています。でもそれだけだとちょっと断熱性能が足りない、その後蓄財して、壁の外側にレンガの壁を立ち上げます。その際に隙間を空けておいて、そこにグラスウールを詰め込み、断熱と構造を強化するのが、最も典型的なゲル地区の住まいです。基礎は無筋のコンクリートですが、かなり立派な基礎を皆さん打っています。



[図64]

ゲル地区における定住の姿

ここまでのまとめとして、一つは余裕ある敷地を利用する住民が少しずつ増えているということで、最近Facebookを見ますと、盛んに「うちはこんな庭をつくったぜ」という自慢話を投稿しているページがFacebook上にありまして、定住生活も長くなってくる中で、徐々に土地を利用する人が増えていけば、ある境目や臨界を越えると、皆さんやり出すのではないかなと思います。ただ、これには実は技術が要ります。すごい乾燥気候なので、日本のように勝手に雑草は生えてこないし、雑草にも良し悪しがあります。木もただ植えただけでは枯れてしまうので、例えば木を植えるとき、少し地面を掘り込んで水がたまりやすいようにするとか、そうしたテクニックがあります。Facebookの庭づくりのページを運営している方が植物の専門家で、その方がいろいろ教えているので、徐々に広まっていくようです。でも今後、土地を緑化する人は増えていくのではないかと僕は予想しています。

それからコミュニティ意識は、われわれと全く感覚が違います。隣近所の人と交流する感覚を、モンゴルの人はあまり持っていないのです。いろいろな地方から都市部に集まってきて、大体2m以上の高い柵を立てて、どちらかというと通りに対して閉鎖的に家をつくりま^す。隣近所との関係を一軒一軒聞いていると、大体あいさつ程度です。それほど仲良くなっていない。まして隣近所で一緒に何かやろうということはあまりない。それぞれの住区ごとに地区長みたいな人がいて、電気代を集めたりしていますが、たまたまその地区長がすごく人を束ねる力のある場合は、先ほどお見せしたように、住民がみんなフェンスを緑に塗るといったことも起こり得ますが、多くは比較的希薄というか、そもそもコミュニティの意識がありません。だけど、これも徐々に変わっていくのではないかなと思うのです。それに気付かされたのは、アジア開発銀行が援助して、フェンスを見通しのいい鉄柵にしたエリアを見に行ったときに、住民に「これ住みにくくないの」と聞いたら「いや、中が見えるようになって初めて気付いたけど、みんなに見られることによって、逆に敷地をきれいにするようになったよ」と言ったり、「こういう植物を置いて、レモンの木を植えたので、すごくきれいだろう」と自慢したりするのを聞きました。つまり、これまであまり外に対して意識してこなかっただけで、一度知ると皆さん気付かれるので、定住の文化が、現代のゲル地区はまだまだ移行期にあって、今後少しずつ住民の気付きが増えてきたときに、ゲル地区は本当の下町として、がらっと生まれ変わるのではないかと想像しています。

それから、まだうまく言葉になっていないのですが、ゲル地区にはどこか仮住まい的な感覚が明らかにあると思います。定住といっても、われわれの定住と同じ感覚ではないなと。先ほども申し上げましたように、彼らにとっては当たり前ずっと長く住んでいるけれど、土地

に対しての愛着というものでもないのですが、一時的な感じがするのです。

また、ゲルは今では完全に住居補完の便利なツールとして認識されています。もちろん伝統的な住まいという意識もあるし、大体皆さんゲルは好きですが、便利なツールと化しています。だからずっと使われていくだろうと思います。

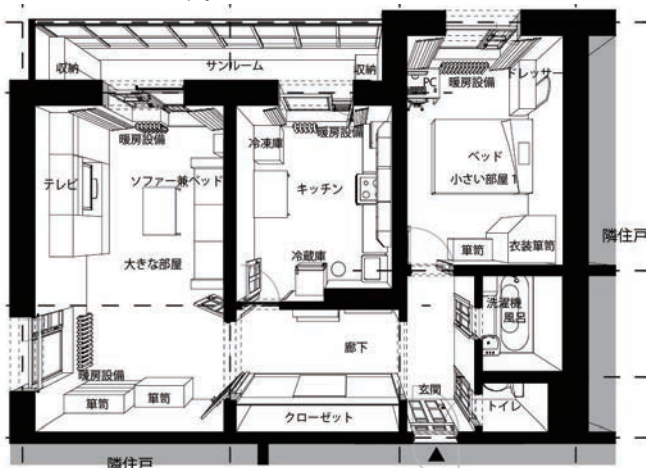
そして、ゲル地区にあえて住む人は、自然としての大地の近くに住みたいとおっしゃる方が多いです。

社会主義時代のアパートの調査

次に、アパートの話に入りたいと思います。2019年に一度調査に行き、15軒回りましたが、その後2020年、21年はコロナの影響で調査ができず、2022年もいきなり人の家にずかずか入る調査は遠慮した方がいいかと思い、資料調査に集中したので、まだ初期段階になりますが、調査の一端を紹介します。

社会主義時代のアパートメントも、調べ出すと非常に面白いです。やはり年代ごとにデザインや構法の変遷があるということと、公文書館で図面が発見されたこともあり、平面図を見ると、間取りが明らかにモンゴルのではないです[図65]。ゲル地区をたくさん見てきて分かったことは、モンゴルの人たちは、家族共有の場所はできるだけつなげて使います。その中の領域分割では、床の張り替えをしたり、ちょっとした小壁を出したり、壁があっても扉を設けないとか、そういう感覚が多いのですが。ソビエト連邦の設計者が設計した間取りは、完全に独立した部屋同士を扉で仕切る、それらを廊下でつなぐというプランなので、おそらくモンゴルの方々は、それを変えて住んでいるだろうと想像したのです。それを確かめたくて、一軒一軒、調査を始めています。

住民へのヒアリングはゲル地区と同じようにやっていて、生活場面についても聞いています。その一方で、公文書館にはお宝のような図面が膨大に残されていることが分かったので、それも今、一生懸命調査しているところです。



[図65]

これが社会主義時代のアパート群の姿です[図66]。中はこういう様子です[図67]。やはりプライバシーの感覚は、ゲル地区とは比べものにならないくらい皆さん高いので、基本的に知り合いの家しか調べられなくて、このときは僕の研究室にバスカ君というモンゴル人の留学生がいたので、バスカ君に友達、友達の友達、親戚、親戚の友達に声を掛けてもらい、ようやく15軒、中に入らせてもらって調査できました。ですから、こちらでは調査対象を選べない状況でした。

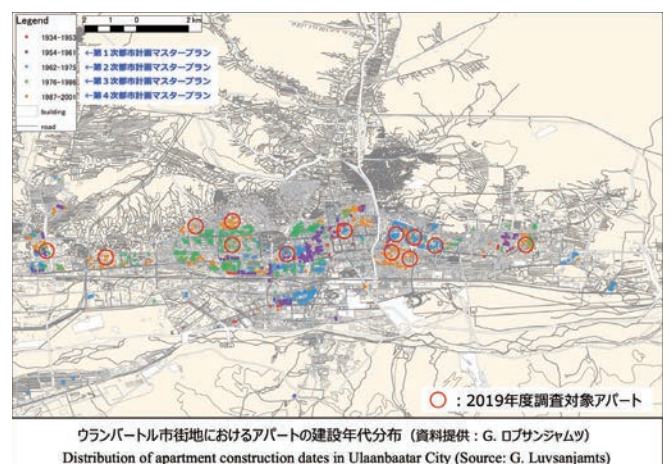
これは僕がモンゴルの研究をするきっかけを与えてくれたガンゾリック君が、東大の都市計画の大学院でつくってくれた、ウランバートル市街地に残っているアパートの建設分布図です[図68]。各マスタープランの年代ごとに色を分けています。大体やはり中央部に古い建物が建てられ、その後どんどん外側に広がっていきます。



[図66]



[図67]



[図68]

社会主義時代のアパートの外観・建築構法の変遷

これはまだサンプルが少ないですが、2019年に調査対象となった15軒のアパートメントを整理した表です〔図69〕。それぞれのマスタープランの時代ごとに分けています。

構法的には、初期はれんが造になります。その次の1970年代にPC※5が用いられるようになります。やはりれんがは効率が悪いということと、燃料を大量に消費するので、ソビエト連邦がPC造の構法を持ち込むことになります。PC造は工場で生産して、現場ではそれを組み立てるだけなので、確かに非常に効率が良いです。冬も建設ができるので、その後ずっとPC造でつくられるようになりました。PC造でも、初期の頃は洗い出し※6で、すごくいい感じです。おそらく僕が想像するに、当時の技術者が「いや、PC素地だとつまらないよな」と思ったのではないのでしょうか。それで洗い出しを思い付いて、初期のアパートは洗い出しで仕上げていっているので、汚れがうまく沈着して、とても雰囲気がいいです。これらはれんが造のアパートと合わせて歴史的な建造物として保存するといったと思っています。

ただ、その後のPC造は塗装やタイルになり、合理化されていきます。この新しい年代のアパート群は、やはりいい古び方をしていなくて、徐々に壊されていく運命にあるかもしれないと思っています。

ちなみに、共立女子大学の松本年史先生が国土交通省の補助金を取って、僕も一緒に立ち上げたNPO法人GERで、このPC造の建物が大丈夫なのかという構造の調査をしたのですが、モンゴルは地震の頻度が極めて少ないということもあり、構造的には今でも大丈夫でした。ただ、シール材が劣化しており、そこから冷気が侵入するので、そこは問題ですが、シールをきちんと打ち替えれば、まだまだ使えると思います。

このPC造のPCは非常によくできていて、設備配管のルートまで全部組み込まれて、きちんと溝が掘られているのです。おそらくソビエト連邦でかなり熟成された手法で、それを輸入したのだと思います。非常によくできたPC造です。

	4階建	5階建	9階建
第一次都市計画 マスタープラン 1954-61年 建設		レンガ造 PC造（洗い出し）	
第二次都市計画 マスタープラン 1962-75年 建設		  	レンガ造 PC造（タイル・塗装）
第三次都市計画 マスタープラン 1976-86年 建設		  	
第四次都市計画 マスタープラン 1987-2001年 建設		   	 

〔図69〕

これは初期のれんが造の建物です〔図70〕。元々白かったと思うのですが、ちょっと化粧直しされて、黄色く塗られています。その次もれんが造で、右下はPCの洗い出しです〔図71〕。れんが造の集合住宅もなかなかかっこよくて味があります。それ以降はタイル張りや塗装になり、だんだんつまらなくなっていくます。

公文書館で調べても、この後のPC造の図面はほぼ1つのパターン of 繰り返しで、図面も全部A3判で、ほとんどコピーです。その中でAタイプ、Bタイプ、Cタイプをチョイスできるようになっていて、場所ごとに選ぶという感じです。住居の構成員は、社会主義時代は職場ごとに1つのアパートに住んでいたことが、2022年に調査した際、公文書館の資料で分かりました。大体、「〇〇工場の〇〇労働者のためのアパート」というふうに名付けられています。ですから、構成員の家族構成が分かったら、それに応じて、間取りはこのAタイプ、Bタイプ、Cタイプの組み合わせでいこうと決めて、それで自動的に建設に入れるという合理化がされていたのだと思います。



〔図70〕



〔図71〕

間取りもきちんと実測調査をして、住まいの様子をどう表現したらいいか考えたのですが、結果的にこういう見下げパースをつくって分析しようとしています〔図72〕。肝心の間取りをどう変えているかについては、調査した住居に該当する設計図書が見つかった場合は、それと比較すればどこを変えているかが分かるので、それを洗い出しました〔図73〕。例えば扉を取り払うのは、よくやられています。彼らが小さい部屋と呼んでいる個室、あるいは子ども部屋、寝室だけは扉が付けられていますが、その他のゾーンに当たる廊下、キッチン、トモロー（大きな部屋）、この辺りの家族にとって共用スペースは、できるだけ扉を取っ払ったり、大きく開口部を広げて使っていたりするケー

スが多々見られました[図74]。これはやはり予想通りでした。

中にはキッチンの位置を強引に変えている方もいました[図75]が、これも非常によく分かります。彼らが大きな部屋と呼んでいるトモローは、ゲル地区やゲルでは、そこに食事の場もあるわけですから、アパートでキッチンが離れている場合、非常に違和感を感じるだろうというのはあって、キッチンに移設した方の気持ちは非常によく分かります。

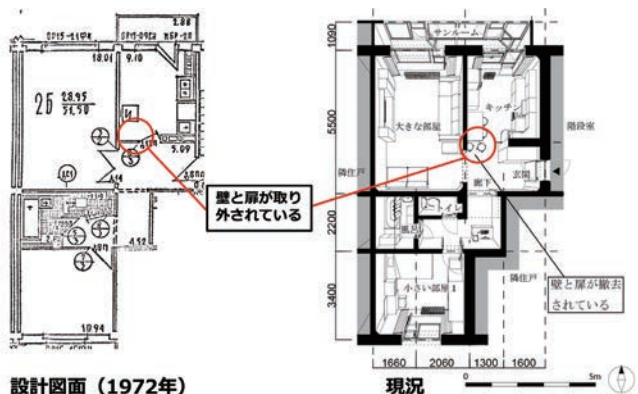
あとはベランダを室内化しているケースもよく見られました。部屋の使われ方は、事例が15軒しかないので、まだあまり大した分析ができていないです。

※5 プレストレストコンクリートの略称。規格化された壁などを構成するコンクリート部材を事前に工場生産し、現地で鉄骨の骨組みにはめ込んで組み立てる工法に用いられる。

※6 コンクリート打設後、完全に硬化する前に表面を洗い流し、砂や砂利などの骨材を露出させる仕上げの手法。



[図72]



[図73]

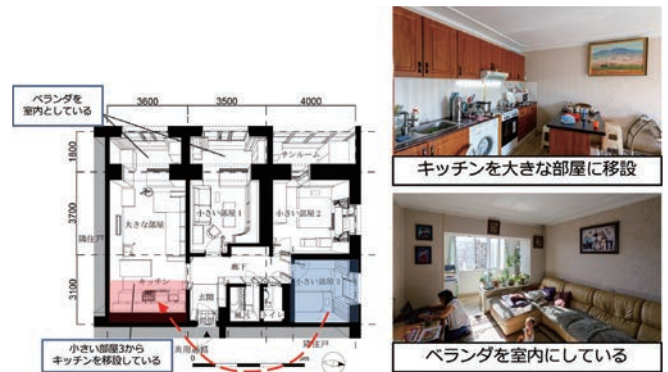


大きな部屋 (左はキッチン)
Large room (kitchen on the left)



キッチンより右に大きな部屋を見る
View of the large room to the right from the kitchen

[図74]



[図75]

国立公文書館での実施設計図書の資料調査

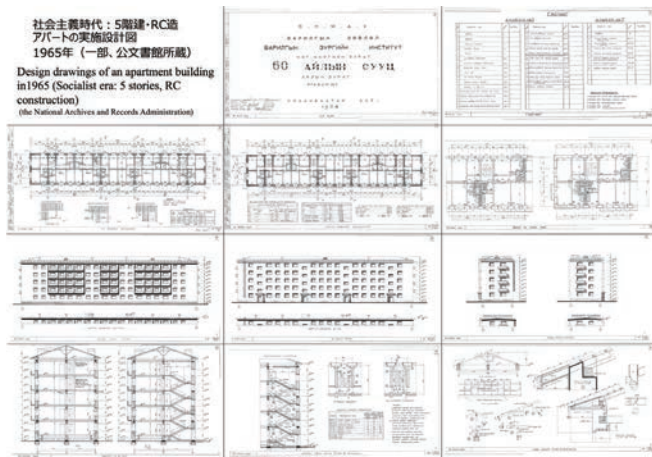
国立公文書館[図76]での図面の調査は、まだ始めたばかりですが、これはかなりわくわくする調査で、原図がかなり良い状態で残っています[図77]。トレーシングペーパーにインキングした図面が残っていて、しかもモンゴルの研究者もまだ手つかずの状態ですから、僕が初めて掘り出してるんだという気持ちで、本当にわくわくします。ただ、ポーランドからの研究者も来ていたので、そのうちどんどん発掘されていくのだと思います。

都市計画図も一部残っており[図78]、他の都市計画図や公共施設の設計図面もおそらくあるはずなので、これはどんどん調べていきたいなと思っています。

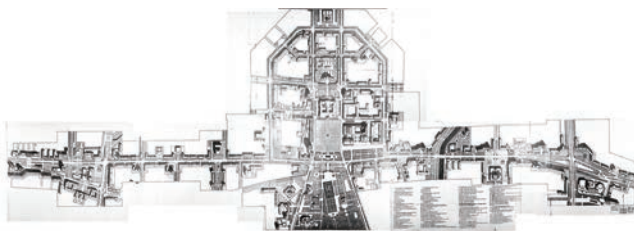
社会主義国家における都市建設というテーマに結び付ければ、ソビエト連邦やウクライナ、他の諸国との共通項がおそらくかなりあります。ソビエト連邦が輸出したわけですから。その辺りの全貌を、まずはモンゴルから確かめていきたいのですが、ロシアはもう調査できないので、せめてモンゴルだけはしっかり解明していきたいと、今決意を新たにしているところです。



[図76]



[図77]



[図78]

間取りのタイポロジー

間取りのタイポロジーも少し分析しました。これは2022年に調査したものです[図77]。先ほど申し上げましたように、1970年代後半以降のPC造は、基本的にはほぼ標準形のチョイスです。住棟の間取りはいろいろなパターンがあって、ときに文字を表すようなパターンもあって面白いです。その職場の家族構成や年齢を見て、これはAパターンの間取りでいこうと決めているのかなというのが見えてくるところです。この同じPC造のシステムの中で、このように間取りをうまく割って、1人世帯タイプや2DKタイプ、3DKタイプをうまくつくっている様子が見えます[図79]。

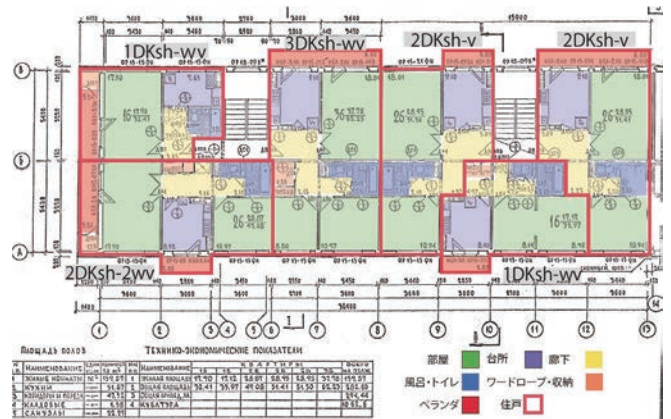
僕がむしろすごく興味を引かれるのは、その前のれんが造の建物です。初期のソビエト連邦の役人や、モンゴル人の中でも役所の人や政府の議員など、そういう中心となる人たちのための住まいがれんが造でつくられていて、非常に丁寧に設計されていました。当時の原図を見ると、設計者の意気込みとか、ちゃんとやらなきゃならないという感じの思いが非常に伝わってきます。そうした図面をできるだけ多く明らかにして、皆さんに紹介していきたいと思っています。

最後に、社会主義時代のアパート以降、今、民間のアパートが続々とつくられていますが、その間取りも少し気になっています。その理由は、僕の研究室のモンゴル人留学生の女性が不動産関係の仕事をしているので、設計した図面を一部見せてもらったところ、明らかにモンゴル人の感覚で、玄関を入るといきなりトモローという大きな部屋があり、その先に個室があるという間取りをしているので、やはりモンゴル人が計画するとモンゴル的な間取りになっていくのだろうと

思いました。そのときに、社会主義時代の間取りとの関係はどうかとか、まだこれから考えたいことがたくさんあります。

僕が大学にいられるのは残り10年を切り、あと9年しかいらませんが、できる限りライフワークとして続けていきたいと思っていますところ です。

以上で発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。



[図79]

DISCUSSION

重村 力(神奈川大学工学研究所客員研究員)

中井邦夫(神奈川大学建築学部建築学科教授)

柏原沙織(神奈川大学建築学部建築学科助教)

須崎文代(神奈川大学建築学部建築学科准教授)

石田敏明(神奈川大学工学研究所客員教授)

山家 ありがとうございます。非常に盛りだくさんな内容で、皆さんからもたくさん伺いたいことがあるだろうなと思いました。せっかくなので、皆さんからご質問などありましたら、よろしく願い致します。

重村 そうしたら、僕から4点申し上げます。

一つ目は、一番最後にソビエト連邦によるPC造アパートのプラン類型のことを話されていましたが、実は1960年代までは日本でも研究していたのです。ソ連建築研究会、略してソ建研というのがあり、市浦健さんや早川和男さん、藤井正一郎さん、鈴木成文さん、他にももっとたくさんいましたが、そういう人たちがソ建研をやっていたのです。新宿にソ建研の人たちがよく飲みに行く居酒屋があって、そこで僕らは「伝統左翼は嫌いだけど、ソ建研のおじさまたちは面白いな」と思って付き合っていました。それで僕は早川先生の助教授になったのです。日本建築学会の図書館や東京大学の図書館には、多分そのソ建研の資料があるのではないかと思います。唐崎健一さんや日本住宅公団の方もたくさんソ建研に入っていたので、公団の図書室にもあるかもしれません。そこで僕が昔見たような資料と似ているなと思いました。

もう一つは、1980年に僕は大连やハルピンによく行って、大连には長期滞在していました。ご承知のように、ある時期の中国はとにかくソ連と仲が良かったわけです。ところが1950年代から仲が悪くなり、1960年代にはソ連人の技術者をみんな追放しました。それで、そういう技術者たちの立派な宿舎があって、僕たちが大连に行くと、昔ソ連人が住んでいた家に住まわせてくれるのです。だから、今も多分あると思うのですが、大连にあったれんが造やPC造の社会主義時代の建物は、モンゴルのものと似ているのではないかと思います。プランを見ていて、そう思いました。中国とモンゴルは地続きですから、特にハルピンのある黒龍江省は、隣が内モンゴル自治区です。内モンゴル自治区と、外モンゴルと呼ばれているモンゴル人民共和国は、文化人類学としては本質的に同じですから。

どこだったか忘れてしまいましたが、僕は一度、中国の郊外にモンゴル人がゲルを建てたから見に行こうとって、中国の先生方と見に行ったのです。そのとき、ゲルはあつという間に建てられたのですよね。2時間もあれば建て終えて、宴会が始まると言っていました。それな

らば、ゲル地区の敷地の中でも解体して、フェルトを虫干しするなりして、それで気持ちがいい場所に建て替えることも、簡単にできるのではないかなと思ったのですが、その辺りが分からないところです。

それからもう一つ、今日のお話でお聞きしたいと思ったのは、柵で囲った四角い長方形の中にバイシンとゲルを建てるという屋敷配置です。それは不思議だなと思って聞いていたのですが。一方で、モンゴル人たちが何も柵がないような草原に野営地をつくるときに、モンゴル研究者の磯野富士子さんなど、昔から研究している人の資料を読むと、何か秩序が感じられないのです。堀も何もないし、円環状になるわけでもなく、碁盤状になるわけでもない。だから、一般的にゲルというのはどういう原則で配置されているのかが謎で、一度見に行きたいと思っているのですが、その辺りはどうなんですか。ゲル地区は、言ってみれば碁盤状秩序とゲルのマリアージュのような感じですよね。それがどこから来ているのかなと思いました。

全体的には大変興味深く聞いていました。ありがとうございます。

八尾 ありがとうございます。

定住生活でゲルを使わない理由は、一つは、近年ウランバートルは時々すごい大雨が降ります。そのときに、排水の仕組みもきちんとしていないので、道路が川のようになってしまうたり、ひどいときはゲル地区の中でも川沿いのところは水浸しになったりもします。やはりゲルにずっと住むのは、ちょっと条件が良くないのだと思います。

定住生活でゲルを解体して虫干しというのは、実際その場面に会ったことがあります。ずっとゲルで暮らしていたおじいさんとおばあさんが、ウランバートルにいる息子に呼ばれて隠居生活というか、息子の持っている敷地でもずっとゲルに住んでいる方がいて、何度か訪ねていたのですが。ある日訪ねたら、ゲルがないのです。解体して虫干ししているから、その間どうしているかという、車庫代わりのプレハブの中で暮らしていて、ものすごく不機嫌でした。

遊牧だと、牧畜を放牧する、それから家畜の頭数をコントロールするためのいろいろなテクニックがあって、結構忙しい中でゲルの解体、組み立てをしているから成立しているのであって、おそらく定住生活にはマッチしないのだと思います。だからあくまで仮住まいのツールであって、ずっとそこに住むのはつらいのかなと思います。

配置の問題については、草原の中のゲルはやはり家畜と共にあって、梅棹忠夫さんが書いているのですが、人間がコントロールするというよりは、馬に寄り添って住まいを変えるのだとおっしゃっていて、まさにそういう感じです。だから、人間の秩序ではないのだと思います。宿営地に何棟もゲルが集まったとしても、入り口の向きは南か南東向きにして、あとはお互いに陰にならないように配置するだけです。そうすると、東西に並ぶかたちを取りがちではありますが。

山家 すみません、モンゴル初心者に教えていただきたいのですが、遊牧民の人たちは、世帯ごとに動いてるのですか。元々コミュニティのような移動の単位があるのですか。

八尾 ないです。宿営地でも世帯ごとです。ゲル地区にやってきても、世帯ごとに独立して暮らしています。

山家 写真で見せていただいたハシャー、木柵は高さ2.5mでしたか。緑色に塗られているにしても、相当高いなと思ったのですが、あれは見えないようにしているのですか。なぜあれほど高いのだろうと疑問に思ったのですが。

八尾 はい。昔は2.5m、今は2mちょっとですが、高いです。中は見えません。理由はいまだに僕にも全然分からないのです。

山家 もしかすると、一番最初につくられたのがひな型になって引き継がれているかもしれないとお話がありましたが。

八尾 それもヒアリングしています。「何で高いのですか」と聞くと、げげんな顔をされて、「当たり前だから」とおっしゃるのです。

重村 防犯という理由はないのですか。

八尾 防犯のためと言う人はいます。「一度テレビを盗まれたから、ちゃんと守りたい」とおっしゃった方はいますが、ほとんどの方は「みんなそうしているから」という答えです。

重村 遊牧に関してはいろいろな本を読んだことがありますが、馬や自動車で宿営地に近づいたときに、主人が犬を制止するまでは地上へ出るな。そうでないと犬にかみつかれる、という文章を読んだことがあります。だから、遊牧民は犬を塙の代わりにしていたのかなと思います。

八尾 遊牧民の方と出会うと分かるのですが、外や家の概念が僕たちとはまるで違っています。ゲルだけが家ではなく、外での生活も相当されています。ある方は外にソファを出していましたが、おそらく外も含めての家、つまり彼らにとってはゲルの周りの領域も家なのです。それが高い柵に結び付くのかどうかは、ちょっとまだ分かりませんが。

中井 建築学部の中井と申します。今日はありがとうございました。非常に面白くて、何から聞いていいか分からないぐらい興味を持ちま

した。

基本的なことで恐縮ですが、幾つかお聞きしたいのは、最初の方に、土地所有に関する法律で、ゲル地区の区画が国民1人当たり0.07ヘクタール無償で与えられるというお話がありましたよね。この数字には何か根拠があるのか、なぜ0.07ヘクタールなのか、疑問に思いました。

それから先ほどの、ハシャーの中にバイシンとゲルが同居した居住スタイルがすごく面白いなと思いました。今後も補助ツールとしてゲルは残っていくのではないかとお話しされていましたが、どのくらい長期的に生き残っていくのか、世代が変わって定住が定着すると消えていってしまうのかどうか、その辺りについて、もしお考えというか推測があればお聞きしたいなと思いました。

八尾 0.07ヘクタールの根拠は、僕も今尋ねられて、はたとしましたが、現時点ではお答えできません。でも根拠があるはずなので、調べてみます。アジア開発銀行の圧力でつくった法律なので、おそらく経済的な計算、つまりそろばんをはじいて出している気がします。当時の都市部の人口と、住民にどれくらいの面積の土地を与えたら売買するようになるのかとか、そうした経済的な根拠で出しているのではないかと思います。あとは、これは推測なのであまり答えになっていないかもしれませんが、社会主義時代につくられた整然としたゲル地区の写真をお見せしましたが、大体あの大きさが基準になっている可能性はあるかなと思います。すみません、今ははっきりとお答えできませんが。

それから、ゲルはずっと残っていくのではないかと僕が思っているのは、ゲル地区とはちょっと違うのですが、かなり経済的に豊かな方の、いわゆるデタッチドハウスという一戸建ての家に一度お邪魔したことがあって、その方がやはりゲルを2棟持っていました。「ゲルは何に使うの」と聞いたら、「夏は庭に出して子どもたちの寝室にするのよ」とおっしゃっていましたが、そういうツールになります。夏、ゲルは裾をまき上げると、ずっと空気が流れて本当に爽やかで良い寝室になるので、そういう実用的な、かつ伝統も感じながら住む部屋として、ずっと使われていくだろうと、そのとき想像しました。

とにかく便利です。先ほど重村先生もおっしゃったように、たった2時間で建てられて、夏は気持ち良くて、冬はストーブさえ焚けば、表面積が極めて小さいかたちをしてるので、すぐに暖まります。モンゴルでの生活には非常に便利な完成形だと思うので、ずっと使われていくのではないかと、なくなることはないと思います。

柏原 私はベトナムのハノイを研究していて、ハノイにもソビエト時代に建てられたアパートがかなりあるのですが、私は商業地の方が研究対象なので、これらの建物は見ていませんでした。すごくぼろぼろの

状態になっているアパートも結構あるようです。明日からまたハノイに行くのですが、その建て替えや建て直しをやろうとしている研究チームの方に連れていってもら予定です。今見せていただいたモンゴルのアパートは、結構きれいに普通に使われているところが多いなという印象でしたが、どうしてもなく建て直さなければならない状態になっているような、そういう問題は残っていないのでしょうか。

八尾 モンゴルは断熱だけが問題で、先ほど申し上げたように、シールの目地の部分が劣化して、そこから冷気が入ってきます。どうしているかという、自分の住戸のところだけ、外側に発泡スチロールを貼って断熱を強化している家がよく見られます。それ以外の構造的な面などは、調査していてもそれほど問題を感じないです。

柏原 住んでいらっしゃる方が結構、意識が高いところもあるのですか。

八尾 一応管理する仕組みがあって、管理人がいます。それぞれの住棟ごとに管理室があり、管理人が住民のごみ出しのマネジメントとか、外構の花の手入れをみんなでやるとか、そういったことをいろいろ仕切っています。だから、それなりに古びていますが、二百数十ブロックという相当残っている住棟は、一応みんな使えています。

柏原 ハノイの方では、写真を見せてもらったところ、斜めになりかけてるところもあって、構造的にも問題がありそうなところがありました。

八尾 ハノイにはそうした問題があるのですね。モンゴルは大丈夫そうです。そういう斜めになっているものはないです。おそらく地盤とか、地震がほとんどないこととか、そういうことも影響していると思うのですが。モンゴルの場合は凍土層があります。凍土層をしっかりケアしないと、それが溶けたときに建物が傾く可能性があって、その処理をきちんとしていないといけませんが、多分その辺りの技術はしっかりしていたのではないかと思います。ウランバートル全体を見る限り、そういう傾いたところがほぼ見られないので。

ではまた、ベトナムの情報も教えてください。

須崎 現代建築史、住宅史を専門にしている建築学部で須崎と申します。本日のご発表をとても興味深く拝聴しました。ありがとうございました。

二つ質問してもよろしいでしょうか。実は私の知人が内モンゴルの出身で、お子さんはハーフです。その方は、元々の住まいがゲルで、遊牧生活をされて育ち、大きくなってから家族ごと都市に移住して定住

されたというのを以前から聞いていました。そのため本日のお話も「こういう家庭だったんだな」と、現実的にとても面白く伺っていました。その方は、小さい頃は本当に日常生活のなかに馬がいて、小学校のときも毎朝馬に乗って、子ども同士で競馬をして小学校まで行くとか、ゲルを組み立てるときのお話などを聞いていたのですが、定住する際に馬を手放して、そのお金で子どもたちにお小遣いをあげたり、車を買ったりしたということでした。ゲルから定住型の住まいになった際のビフォーアフターで、何か手放された生活様式と、新しく得られたものが他にもありそうだと思い、何か分かっていることがあれば伺いたいと思いました。

あともう一つは、定住型の平面プランです。大雑把な感想で恐縮ですが、北海道やアイヌのチセ^{※7}の平面プランと近い傾向があるかと思いました。風除室や前室があって、広間のような空間の奥に神棚があってというプランです。おそらく時代をさかのぼっていくと同じようなルーツがあるのかもしれないと思ったのですが、今日お話しいただいた形態の場合はどれぐらいの地域的な広がりがあるのか、もしお分かりでしたら教えていただきたいと思います。

※7 アイヌ民族の伝統的な住居建築。掘立柱を直に地面に立て、壁や屋根には樹皮や茅葺が用いられた簡素な木造建築。上座にはカムイ（神）が出入りする「神の窓」が設けられ、反対側に前室となる玄関や物置が配された。

八尾 ありがとうございます。遊牧の生活と定住の生活は、まるで違いますよね。

須崎 例えば家畜を手放したから、敷地内の構成が変わったとか、何か影響がありそうだなと思いましたが、いかがでしょうか。

八尾 家畜を手放したからという物々交換的な感覚もありますが。ゲル地区の方に、なぜゲル地区に住むのかという話を聞いたときに、もちろんアパートの方が面積の割に高いので住めないという方もいるわけですが、積極的にゲル地区に住んでいる方に、大気汚染などの問題もあるのに、どうしてと聞いたところ、多くの回答はやはり大地でした。モンゴルの方々にとっては、地面そのものが自然なので。われわれ日本人は、自然というと山や木々を思い起こしますが、広がる大地が自然であるという観念からすると、やはり大地に接して住みたいというところがあるのかなと思います。だからアパートに住む人は、大地と近いところに住むということを捨てているわけですよね。

ただ実際の生活面では、アパートの方がはるかに便利で、暖房インフラに接続しているのが一番大きいです。暖房インフラに接続しているから、公共料金を払っていると思いますが、燃料を買う必要もないです。ゲル地区の生活の場合は、年間に4tトラック一杯分もの燃料や石炭を買って、トイレも含め、自分で火を起さなければいけないわけです。インフラが整備されていないのは非常に大きいですよ。

平面プランの類型に関していうと、まだ僕はウランバートルしか住居プランを調べていなくて、今後、地方都市まで広げたいという考えもありますが、地域によって微妙な違いはあると思いますけど、おそらく同じではないかと想像しています。冬の気候を考えると、玄関、キッチン、大きな部屋というのが軸になるところは変わらないのではないかなと思います。ただ、西側の方のカザフ系の人の住まいだと、微妙に変わるかもしれません。あと、内モンゴルは全然違います。内モンゴルは基本的に中国化されたので、住民は早々と農耕をするようになり、ほとんどが四合院形式の家に住んでいます。

須崎 ありがとうございます。私は台所やトイレの歴史を研究しているので、ぜひ一緒に行って拝見したいなと思いました。

石田 石田と申します。ご無沙汰しています。

お聞きたいのは、モンゴル自体が非常に若い年齢層の国民が多いということで、政府としては、ウランバートルなどでは持ち家政策のようなかたちで推進しているのでしょうか。例えば持ち家の場合、年収のどれくらいで購入できるのでしょうか。それからゲルは年収のどれくらいの金額で買えるのか、その辺りをお聞きたいです。

八尾 まず政策的には、完全に持ち家政策ではないです。計画上は、アパートしか計画していないです。マスタープランには、日本のような低層住宅地は、全く計画に入っていないです。

石田 そうすると、最近民間でも住宅供給が増えているという話ですが、これもやはり賃貸アパートですか。

八尾 アパートは、賃貸も徐々に増えてはいますが、多くは購入されています。

石田 購入する場合、年収に対してどれくらいの割合ですか。

八尾 今はちゃんと数字を持っていないので、正確にお答えできません。でも基本的に、30代で結婚された方は、かなり若いですが、皆さん家を買うのは当たり前になっています。独身の方は賃貸に住んでいる人もいますが、家族を持ったら基本的にアパートは買うものという感じです。アパートにも、すごく高いものと、比較的庶民的な値段のもの、いろいろなバリエーションがあります。あと、社会主義時代のアパートも比較的安く買えるので、購入するのがベースだと思います。

ゲル地区は、政府のマスタープランでは、基本的にはできるだけ縮小していくべきものという位置付けです。つまり、ゲル地区も一部は

中高層化して、アパートに建て替えていって、人口を収容したいというのがマスタープランの考え方です。

ただ、僕自身の考えでは、ゲル地区は住民の自力で住む力も大きいので、フォーマルな都市計画に組み込まれることなく、ずっと存続していくのではないかなと思っています。もちろんインフラは徐々に整備されていくかもしれませんが。ただ、固定資産税の仕組みがきちんとしていないが故に、インフラ整備ができないのです。根源には税制が問題としてあります。だから、住民の自力で住む力に任せて、徐々に整理はしていくけれど、ずっと残っていくと思います。

山家 長い時間、ありがとうございました。そもそもモンゴルという国が非常に興味深い上に、資料や実際のフィールドでも調査をされて、とても奥行き深く、いろいろなお話が伺えたと思います。八尾先生、ありがとうございました。

Vol.1

客家の円型土楼 ― その建築様式と集住の知恵

講師: 重村力 (建築家・工学博士)

日時: 2020年11月9日

Vol.2

ハンドメイド・アーバニズム

講師: 尹柱善 (建築都市空間研究所まち再生センター長)

日時: 2020年12月7日

Vol.3

台湾における都市の歴史的環境保全

講師: 藤岡麻理子 (横浜市立大学グローバル都市協力研究センター 特任助教)

日時: 2021年2月1日

Vol.4

「竹」の活用で1分の1から、1万分の1まで ― カレン集落の再生プロジェクト

講師: Terdsak Tachakitkachorn (バンコク チュラロンコン大学建築学部 Assistant Professor)

日時: 2021年2月22日

Vol.5

ベトナム・ハノイ 変化する都市の文化遺産

講師: 柏原沙織 (東京大学大学院新領域創成科学研究科自然環境学専攻 特任助教)

日時: 2021年7月20日

Vol.6

ベトナム・サイゴンの建築と都市の文化

講師: 李暎一 (一般社団法人アジア建築集合体 会長)

日時: 2021年8月25日

Vol.7

メトロマニラにおける参加型社会住宅 People's Plan: 参加の価値の再考

講師: 白石レイ (山口大学大学院創成科学研究科 准教授)

日時: 2022年3月2日

Vol.8

近現代モンゴル: ウランバートルにおける定住と都市

講師: 八尾 廣 (東京工芸大学工学部建築学系建築コース 教授)

日時: 2023年2月28日

発行 神奈川大学アジア研究センター

〒221-8686 神奈川県横浜市神奈川区六角橋3-27-1 電話: 045-481-5661

デザイン 丸山智也、野中優衣 (マルヤマデザイン)

編集 吉岡きくみ

2023年3月20日発行